

談話における話題の導入と形成の方法

野村眞木夫

1. 問題の所在

人の行う言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相をテキストと称し、その音声言語によるものを談話と呼ぶこととする。談話を特徴づける要因には、次の5つを認めることができる。

- (1) a. 談話の目的と話題に関するまとまり
- b. 発話・発話のまとまりの機能と相互関係
- c. 参加者の交替（話者交替）
- d. 参加者の相互関係
- e. 非言語表現

(1a)に言う「目的」と「まとまり」は、文字言語についても見いだされる属性であり、テキストの一般的な特徴である。(b)以下は音声言語の特徴として限定される。発話は、文字言語の文に対応するが、完結したその形態を取り出しがたいばあいが少なくなく、また同時発話の現象や、複数の参加者が共同で一つの発話を表現する例が認められる（ザトラウスキー 2000）。談話の展開は、参加者の交替と相互関係にともなって維持され、さらに非言語表現が言語表現と複合的にはたらく。

本稿は、日本語の談話を検討の対象とし、話題が形成される過程で発話相互の関係と参加者の交替が、談話展開の事象や統語論の事象とどのように関連しあっているのかを観察し、問題を提起することを目的とする。

この問題については、野村(2004)において触れているが、資料を十分に提示する余裕がなかったので、本稿ではこれを補いながら考察を展開する。はじめに野村(2004)を概括しておく。野村(2004)では、形式的な着眼点として、談話における主語およびこれに類する成分、すなわち主語の「～が」、主題の「～は」、取り立て成分の「～も」、無助詞成分の「～」などを取り上げた。そうして、これらが談話のまとまりの成立に機能すること、新たな話題の導入や派生に機能すること、および談話の展開方法と主語などの形態の選択がどのようにかわるのかを観察して、参加者が談話を整える過程に注目した。とくに、どの参加者が主語等に言及し、話題を導入・派生させるかが、談話に対する参加者の優位性の差と相関すること、主語等の形態の選択が談話の参加者の交替（話者交替）や発話の機能・関係と関連することを中核として述べた。

問題の本質は、談話の展開において生じる発話の相互関係や談話の参加者の相互関

係と、談話における個々の発話がになう統語論的な特性とが、たがいに作用しあい、談話の部分的なまとまりをどのように形成するのかを探ることにある。

2. 談話の展開を記述する方法

筆者は、テキストをとらえるレベルを次のように想定している（野村 2000）。

- (2) a. マイクロのレベル：形式的な特徴や統語論の範疇，語の意味を指標として，発話や文相互の関係性を規定する。
- b. メゾのレベル：発話や文の意味・機能あるいは表現類型を指標としてテキストおよび部分テキストのまとまりの組織を規定する。
- c. マクロのレベル：テキストおよび部分テキストの組織や類型性を指標としてテキストを文化的・社会的あるいは制度的に規定する。

このレベルにてらすと、本稿でとりあげる現象は、マイクロのレベルとメゾのレベルの境界領域に位置づけることができる。(2)は、とりあげる談話のサイズに依存するものではないが（野村 2003）、マイクロのレベルでは、語彙・統語論に属する範疇に依拠して談話をとらえるのであるから、具体的な指標は、語や文の成分が中核をなす。メゾのレベルでは、談話の意味や内容を指向する様相がたかくなり、コミュニケーションの組織、すなわちコミュニケーションの環境や参加者・観察者のかかわりかた、談話の話題、談話への言及のしかた、談話に見いだされる類型性等が指標になる。

談話において、発話をとらえる方法には、大略、機能に着目するものと発話の関係に着目するものとを想定することができる。

発話機能に着目する方法には、ザトラウスキー(1993)、Eggins and Slade (1997 Ch.5)などがある。Egginsらによれば、発話機能の分析は、話者ごとに選択した発話機能を全体的に量化し、あるいは、発話機能の選択を会話の展開としてたどるのである。発話機能の種類は種々提案されているが、ここではザトラウスキー(1997)が大局的にまとめた「要求」「表示・提供」「受容」の3種に従う。また、ザトラウスキー(1993)によれば、「談話中の個々の発話相互の関係は、個々の「発話機能」と話題によって決定される」(p.73)という。

さて、発話相互の関係であるが、文や発話相互の意味の面からこれをとらえようとする立場として、Hobbs(1978,1990)、Dahlgren(1988)、Mann and Thompson(1988)、Mann,Matthiessen and Thompson(1992)、Hoey(1991,2001)、Halliday(1994)、亀山(1999)などの提案があげられる。Hoey(1991:265)は、テキストにおける節、文、文の集合を結合する意味的な関係の分析が背景とする仮説を次のようにまとめている。すなわち、あらゆるテキストは原因-結果、対照、一般化-例示、時間的継起のような関係によって構成されており、テキストにおけるすべての文は、当該のテキストの少なくとも1個の文(文の集合)と、少なくとも1個の関係にある、というのである。このような関係の種類は、諸家によって多様に提案されている。本稿の筆者は上記の仕事を参照しながら、(3)のように整理している⁽¹⁾。

(3) 状況（時間，場所・空間）関係

状況（時間）：先行する発話に対して異なる，または新たな時間を特定する。

継起：先行する発話に継起する時間に生じる事態・状態を表現する。

同時：先行する発話と同時または雁行する時間に生じる事態・状態を表現する。

状況（場所・空間）：先行する発話に対して異なる，または新たな場所・空間を特定する。

心理関係

評価（感情）：先行する発話に関係する感情的な評価を行う。

評価（感覚）：先行する発話に関係する感覚的な評価を行う。

論理・概念関係

一般化：先行する発話の提題表現と同一またはその上位概念を提題表現とし，先行する発話の叙述の上位概念またはより簡潔な概念によって叙述を行う。

詳述：先行する発話の提題表現と同一またはその下位概念を提題表現とし，先行する発話の叙述の下位概念またはより詳細な概念によって叙述を行う。

並列：先行する発話の提題表現と同一の概念を提題表現とし，たがいに整合する叙述を行う。

類比：先行する発話の提題表現の同位概念を提題表現とし，たがいに整合する叙述を行う。

対比：先行する発話の提題表現の同位概念を提題表現とし，たがいに矛盾・対立する叙述を行う。

反復：先行する発話の全体またはその一部と同一の内容を，同一の表現によって再度提示する。

換言：先行する発話の全体またはその一部と同一の内容を，異なる表現によって再度提示する。

修正：先行する発話の全体またはその一部に言及し，これを否定する表現または相補的な表現におきかえて，再度提示する。

情報補足：先行する発話で省略されたり不完全に表現されていた語句をおぎなう。

原因・理由：先行する発話で言及されている事態・状態をもたらす原因・理由またはその動機となった事態・状態を提示する。

結果・結論：先行する発話で言及されている事態・状態がもたらす結果・結論またはそれを動機とする事態・状態を提示する。

譲歩：先行する発話から想定される事態・状態の否定を容認する内容を提示する。

反予測：先行する発話から想定される事態・状態に反する内容を提示する。

前景提示：先行する発話で言及されている事態・状態を前提または状況とし、テキストにおいて主要な情報・中核となる出来事を構成する事態・状態を提示する。

背景提示：先行する発話で言及されている事態・状態をテキストにおける主要な情報・中核となる出来事とし、それに対する前提または状況となる事態・状態を提示する。

思考・発話内容：先行する発話で言及されている事態・状態において思考・発話された内容を提示する。

思考・発話解説：先行する発話で言及されている思考・発話の内容について、その表現方法を提示する。

解釈：先行する発話の内容について、コミュニケーションの参加者による意味を付与する。

解説：先行する発話の内容について、定義・注釈・認否を提示する。

評価（価値）：先行する発話に関係する価値や特性の評価を行う。

情報認識：先行する発話で言及されている内容を認識していることを表現する。

交話：先行する発話や状況に対して、定型化された言語形式を提示する。

呼びかけ：先行する発話や状況のいかんにかかわらず、コミュニケーションの任意の参加者の注意をひく発話を行う。

保留：先行する発話に関する情報、または関係の明示を保留した内容を提示する。

これらの関係は、単独の発話の間のみならず、発話と発話の状況の間、発話のまとまりと発話の間、または発話のまとまりどうしの間にも認定するものである⁽²⁾。関係の各範疇は、個々の発話の機能との間に相関性を強く認めることができない。たとえば、「表示・提供」の機能をもつ発話の連続において、発話相互の関係は、継起関係、詳述関係、原因・理由関係など多様でありうる。また、「要求」-「表示・提供」の発話が隣接しているばあい、これが質問-応答であったとしても、発話相互の関係は、一般化、詳述、情報補足、解説、情報認識などが想定できる。発話機能の観点と発話関係の観点とは、発話そのものの属性をとりだそうとする方法と、発話どうし、または発話と発話のまとまりや状況を結びつける関係概念を認定しようとする方法として区別される。これら二つの方法は矛盾するものではなく、談話を理解する際に相補的に作動することになる。

以下、発話の統語論的な特性と談話の展開について若干の事例をあげ、発話の関係および機能を特定することで、談話のまとまりかたがどのように形成されるのかを探る。

3. 話題の導入と形成

本稿で事例としてとりあげる資料は、親しい友人関係にある大学3年生の女性2名ずつ5組による自由談話、130分間の記録である。その談話において、話題がどのような方法で導入されるのか、さらに導入された話題が維持され、あるいは展開される過程を観察する。指標として着目するのは、先に述べた、主語およびこれに類する成分であり、発話者が自己に言及した例と他者に言及した例とを取り上げる。それらが発話の関係・機能、任意の話題に関するまとめり、話者交替などとの関連でどのようなふうにかを記述することで、本稿の目的に接近をはかる。

3.1 発話者による自己への言及

手始めに、コミュニケーションの参加者が、話者として自分に言及する様式をとりあげよう。談話資料から若干の例をKWICの形式で(4)に取り出す。

- (4)a. T: 2人で行ったの? Y: へーへー? Y: 私がー。Y: それでー, 金沢から乗ってーなんか,
b. T: 去年の夏に 私が 帰ってー, Y: へー。T: (1.2)是非,
c. T: へ? 無言で攻める。Y: だって, 私がー, 一番上だから。T あそーかそー//か。
d. K: マスが上に来てるのと, 一応。S: 私が 食べたのはマス上だ。 K: マス上?
e.M: あ O 先生知ってるっけ。D: いやあれ。D: 私は あれは取ってない。M: あ, なんだー。
f. Y: 郷ひろみか。Y: でも郷ひろみは 私は おぼえてない。Y: すたれてた, 私の中では。
g. S: すっごい痛かった。K: はー 私も 指かまれた。S: そーだよな。
h. G: へー。F: なんてそんな数学やかな。F: 私 数学好きだったぞ。F: 数学なかったら,
i. R: へー。N: 私 今度入るよ, ESS。R: カモーン。
j. D: 1回当てられたんだって。M: へー。M: 私 結構去年当てられたよね。

「私が」の形態は、排他的の意味をになう(a)のほか、(b)並列節、(c)理由節、(d)名詞節など、従属節の中に位置する例である。「私は」の形態は(e)主題、(f)対比の取り立てがあり、取り立ての「私も」は(g)のような例である。「私」の形態の無助詞成分は、(h)話者の経験の表現や(i)話者の意思表示の表現、(j)同意を要求する発話など、統語論的な制約や談話上の制約の少ない例に現れている。

ここで対象としている談話資料は、参加者がすべて女性であるため、自称が「私」に統一されている。「自称+の(所有)+名詞」の例を除外すると、話者を指示する自称は、資料中116例である。このうち、(A類)自称名詞が、話者交替の生じた直後の発話の冒頭に位置するか、またはその発話の冒頭におかれた談話標識の直後に位置する例は73例である。(B類)自称名詞が、同一の発話者による発話連続の2番目以降の発話の冒頭に位置するか、またはその発話の冒頭におかれた談話標識の直後に位置する例は10例である。(C類)それ以外の条件で現れる自称名詞は33例である。

それぞれの表現形式の内訳は、表1のようになる。この結果は、談話の参加者が自己に言及するのは、無助詞成分または取り立て、主格(ガ格)として、話者交替の生じた直後に生じやすい傾向を示唆している。

表 1 発話に現れる自称の表現形式

	A 類	B 類	C 類	計
自称 + が	8	2	2	12
自称 + は	2	2	4	8
自称 + も	12	2	2	16
自称 +	50	3	22	75
自称 + その他	1	1	3	5
計	73	10	33	116

それらの例を具体的に観察しよう⁽³⁾。

(5) 1 T: ネギってー, //ネギ冷凍するってゆってたよね, Mちゃんね。

2 Y: んー

3 Y: 本当。

4 T: 私ー, ネギー切っ//たやつ,

5 Y: きざんでー,

6 T: きざんで冷凍するんだよね。

7 Y: んー。

8 T: 私きざんで冷凍したらー, なんてだろ凍っちゃってねー, //がちがち。

9 Y: 凍るよ。

10 Y: だって, 冷凍したら凍るよ。

11 T: そー//ーだよね。

12 Y: {笑}

13 T: ちがう, 冷凍してー, あっじゃ細かくわけ//て冷凍すればいいーのか。

14 Y: あっ。

15 T: とれ//なくなっちゃったの。

16 Y: 私やったことない。

17 T: んーこ, そのたびにがんがんがんがんってたたいてー,

18 T: もどーしよーもないからー, かたまりのままだばっといれちゃったけど。

(5)は, ネギの保存方法が全体の話題である。1 Tでその話題が導入される。Yによる情報認識を経て(情報認識(1T,2Y)と情報認識(1T,3Y)), 4 Tにおいて, この話題に関するTの経験が前景化され, 8 Tまで語られる。4 Tでは無助詞成分の自称が用いられ, 8 Tも同様である。この間, Yの関わりかたは, 「情報補足(4T,5Y)」と「情報認識(6T,7Y)」とである。8 Tは5 Yによる情報補足を考慮した発話で, 「詳述(4T-6T, 8T)」の関係が認められる。4 Tで提示しようとした話題を, 整えて提示し直したのである。以下, Yによる8 Tの発話の部分の反復と11 Tの「情報認識(9Y-10Y,11T)」を経て, 13 Tでは修正した内容を提案する(修正(4T-8T,13T))。15 Tは8 Tに関係する結果の提示である(結果・結論(8T,15T))。

ここまでの展開はTの経験を中核とする談話であるが、Yは、16 Yで経験を語るべく、無助詞成分の「私」で自分に言及する。ただ、この発話は15 Tと同時に表現されている。これに後行する17 Tは、15 Tと継起的な関係にあるが、16 Yとは関係をもたない。

この談話では、部分談話に対する受容の表現(3Yと7Y)の直後に話者交替が生じるとき、発話者自身への言及が生じている。16 Yは同時発話になっているが、13 Tに直接後行する発話として表現されたならば、「前景提示(13T,16Y)」の関係が顕在化し、以下の談話展開の主導権をYが取得する可能性が認められる。しかし、この例では16 Yの発話開始の局面が、いわゆる移行適格箇所(transition-relevance place)として選択されておらず⁽⁴⁾、また発話の開始が15 Tに遅れたため、Yによる発話権の選択が保障されなかったのである。8 Tからの関係性を維持した、Tによる談話展開の計画と、13 Tまでの談話の展開に依存したYの予測とが整合しなかった、ということである。Yの発話の遅れは、13 TとYが予定する発話とを整合させる作業によるものと考えられる。

以上のことから、談話(5)に出現する無助詞成分「自称+」は、いずれも、その発話者にとって、自分自身に言及する話題を導入するために、他者が言及する先行発話との適格な関係性を理解しての表現であると言える。

(6) 1 N: 一匹一買ってくるのー?

2 R: んー。

3 N: うそ//ー。

4 R: いや半身半身。

5 N: あーあーあー。

6 R: んー。 =

7 N: =さばくぜー//とか。{笑}

8 R: {笑}(そーゆーことは)

9 N: 私そーなのかと思った。

10R: いや、さすがにダンドン//とかってゆーことはない。

11N: あーあー。{笑}

12N: 3枚おろしみたいに。

13R: んー、おろせないから。

14N: んー、私もできないな?

(6)は、参加者たちによる自炊の材料と調理方法が話題である。1 Nは、Rの魚の買いかたに関する要求表現である。以下、このことについての発話交換を経て、9 Nは、1 N・7 NのNの判断を中核とする談話の展開に解説をくわえたものであり、N自身に言及してそれまでの展開をとりまとめる発話である(解説(1N-8R,9N))。10 R - 13 Rは、1 N - 9 Nの談話の内容について、さらにRが解説をくわえる展開である。ここで表現されたRの能力について、Nが自分の能力を類比化するのが14 Nであり(類比(10R-13R,14N))、この発話は10 R以下の展開のとりまとめとして機能し

ている。

(6)の自称は、無助詞成分と取り立て成分として、談話内容の解説と相手の参加者の能力に対する類比化を図る発話に用いられており、ともに当該の話者が談話の展開をとりまとめる役割をはたすものとなっている。

(7) 1 S: おいしーよ。

2 K: (0.2)//いーね。

3 S: ーん。

4 S: やっぱ手漬けが一番だね。

5 K: ーん。

6 S: 私も習っとかんと。

7 K: 実家で漬けてる？

8 S: ーんーお婆ちゃんに習ってお母さんが漬けて、

9 S: お母さんに習っ//て、私がやるはずなんだけどねー。 =

10 K: ーんー。

11 S: = //まだやってないんだ。

12 K: ーんー。

13 K: (1.3)私も実家から一瓶もらってこよーかな？

(7)は、梅干しと梅漬けの話題が継続している談話の部分である。自称は6 Sと13Kの「自称+も」および9 Sの「自称+が」である。5 Kまでは、梅漬けの一般的な評価が話題である。

6 Sにあらわれる「自称+も」は、この発話の段階では類比関係にたつ他者が明示されていないが、発話者に言及することで、それまでの一般的な評価から話題を前景化させている(前景提示(4S,6S))。以下、12 Kまでは、7 Kの要求表現に応じてSの経験が詳述される。8 Sと9 Sは、並列的な関係で表現され、またこの2つの発話は典型的な表現で整えられている。「習って漬ける」ことは6 S - 7 Kの段階で主題化されており、8 Sと9 Sは、「誰に習って誰が漬ける」のかをそれぞれ排他的に表現しているのである。

13Kの「自称+も」は、6 Sから12 Sまでに表現されたSの経験に対して13 Kの発話が類比関係にたつために選択された形態である。発話の関係は、類比(6S-12S,13K)のようにとらえられる。ここでは1.3秒の沈黙をおいており、話者交替に費やされる時間からしても、SからKへ談話の主導権の委譲が明示的に行われていることが理解される。

この談話では、発話者が取り立ての「自称+も」によって指示される発話が、談話の組織と発話権の取得に関連して用いられる過程を明らかにした。

以上の3例において、自称が最初、または最初の談話標識の直後に現れている発話は、その発話に先行し、あるいは後行する部分談話、すなわち談話の一定のサイズのまとまりとのあいだで、話題のきりかえやとりまとめの機能をはたしていることが理解されよう。自称によって話者が自己に言及することは、特に発話権、または談話の

主導権の取得に作用することが予測できる。排他，取り立てのばあいや，従属節における統語論的な制約が生じているばあいを除くと，「私」は無助詞成分で表現される傾向にある。

3.2 発話者による他者への言及

本節では，発話者が他者に言及する例を取り上げる。前節と同様の基準で，3類に区分する。(A類)他称名詞が，話者交替の生じた直後の発話の冒頭に位置するか，またはその発話の冒頭におかれた談話標識の直後に位置する。(B類)他方名詞が，同一の発話者による発話連続の2番目以降の発話の冒頭に位置するか，またはその発話の冒頭におかれた談話標識の直後に位置する。(C類)他称名詞が，それ以外の条件で現れる。この区分によって，資料中の表現形式をまとめると，表2のようになる。

表2 発話に現れる他称の表現形式

	A類	B類	C類	計
他称 + が	27	12	42	81
他称 + は	17	7	9	33
他称 + も	11	7	2	20
他称 +	39	13	20	72
他称 + その他	7	1	11	19
計	101	40	84	225

自称のばあいに比較すると，主格(ガ格)が生じやすいのに対し，無助詞成分の生じる率が低く，また，話者交替直後に「～は」が生じやすい傾向が観察される。

- (8) 1 T: 私，見たいーでもないけど，テレビつけてるとやってるー。
 2 T: あれ見てるとラーメン食べたくなるんだよ//{笑}なんとなくー。
 3 Y: {笑}
 4 T: あー//ラーメン食べなきゃーとかっておもー。
 5 Y: なんてだー。
 6 Y: いやーいーなー？
 7 T: んー，見れるよ。
 8 Y: なんかAがねすごい楽しみにしててー，
 9 T: Aちゃんあーゆーの好きだよねー。
 10 Y: Aちゃん//好きだよねー。
 11 T: あーゆー時間帯のドラマみんな見てるよね。
 12 Y: んー。
 13 T: チェック，
 14 Y: A網羅て感じだよね。

15 T : んー。

(8)は、あるテレビ番組とその嗜好を話題とする談話の部分である。引用部では、7 Tまでその番組を見る時間帯の都合について情報が提供されており、Tに主な発話権が認められる。8 Yで、Yは「なんか」によって発話権を取得したあと、それまで言及されなかったTとYの共通の友人「A」を新たに「他称+が」で導入する。ここに、前景提示の関係が成立している。すなわち、「前景提示(1T-7T,8Y)」である。以下、「A(ちゃん)」が無助詞成分で発話の開始部分に連続し、参加者TYによって、これが部分談話の話題として維持されていることが明かである。(8)は、話者交替において発話権取得の標識を明示し、「他称+が」によって話題をきりかえ、新たな事態を前景化する談話展開として理解できる。

(9) 1 Y : それでー、御飯はー、

2 T : んー。

3 Y : わりとお婆ちゃんが作ってくれたりとかしてた。

4 T : あそーなの。

5 Y : 最近はー、お婆ちゃんそんなしなーい。

6 Y : お婆ちゃんのやるのは煮物とかー、

7 T : んー。

8 Y : そーゆー料理はお婆ちゃんがやるけど、

9 Y : あとはお母さんがしてる。

10 T : あーお母さんなに帰ってきてから作るの。

11 Y : んーん。

(9)の談話では、Yの家庭で「食事は誰が作るのか」が話題である。談話展開の主導権は、Yにある。Yの発話の中核をなす構造は、「対象は - 他称者が - 作る」であり、この文型が、[1 Y・3 Y]、[6 Y末尾・8 Y]、[9 Y]で繰り返し表現されている。「他称+が」の形式はこれらの発話に生じ、「お婆ちゃん」と「お母さん」の間には、相互に排他性が認められる。対象となるの料理を対比関係で取り立てながら、料理の作り手を排他的に表現しているのである。この例では、談話中で使用される文型に依存して「他称+が」の形式が選択されていて、この文型に関与しない5 Y、10 Tでは無助詞成分が使用されている。なお、6 Yの「お婆ちゃんの」の形式は、名詞節内におさまることによる。(9)は、発話者が家族に言及する方法として、一定の文型を選択しており、この連続によって談話のまとまりがもたらされているのである。

(10) 1 T : それは帰ってくる日の、

2 Y : んー。

3 T : 夕飯。

4 T : 最後の晚餐、

5 Y : んー。

6 T : だったのにー、

7 T : //私のおんかけをー、もー床に//しみこましてしまったの。

8 Y : Tらしーねー。

9 Y : そいで、それは全部だめになったの？

10 T : 半分。

11 Y : (1.6)親ー大変//だったでしよー。

12 T : 親は悲しーやら嬉しーやらだよねー？

13 Y : んー。

(10)は、Tが自分の家庭で料理を作った失敗談としての経験をYに語る談話の部分である。7Tまでその語りが継続し、9Yと10Tは語りの内容に関する解説の質問応答である。11Yで1.6秒の沈黙をおいて、YがTの親の反応を前景化し(前景提示(9Y-10T,11Y))、12Tは、11Yの「親」他の家族から取り立てた詳述であり、「他称+」「他称+は」で開始される発話が連続する。13YはTの発話に対する情報認識として関係する。

話題の性質から、Tの言及する食事の場に親が同席していたことが既に明かであり、「親」の導入は、無助詞成分による主題と「は」による取り立て成分として表現されている。この談話では、Tによる料理の物語に関する話題を維持しつつ、Tの一連の行動と解説、親の反応へときりかえながら展開させている。このきりかえにおいて、談話展開の主導権がTからYに移動し、部分談話11Y-13Yのまとまりが、YがTの「親」に言及することによって開始されているのである。

(11) 1 G : お母さんとか都会、ん東京いったら、もにさんにいたら、二三日いたら帰ってきたくなるって言わない？

2 F : (1.2)ん？ 知らなーい。

3 G : 早く帰ってきたくなるって。 =

4 F : = あ。 =

5 G : = ゆー。

6 F : ばー、うちのお婆ちゃんはゆーなー。

7 F : うちの弟もゆーな。

8 G : 生活する気には、どーしてもな//らない。

9 F : あー、東京、自体？

10 G : 東京、とか、まー、んー、神奈川とか、ずーっと、あのへんの。

(11)では、家族の行動様式が話題になっている。1Gで無助詞成分「お母さんとか」で家族を主題としてとりあげる。2Fの否定的な解説(解説(1G,2F))と3Gの情報補足(情報補足(1G,3G))を経て、話者交替の後、6F・7Fで、Fの家族のメンバーが「他称+は」「他称+も」によって取り立てられる。6F・7Fは、要求表現である1Gに対する応答として詳述の関係性を有している。1Gで導入された話題に帰属する例示の表現であり、談話を維持する主導権は、Gが保持している。

(10)(11)は、先行する発話連続のある段階で、家族の任意のメンバーに言及させうる部分談話が展開されていて、「親」「お婆ちゃん」「弟」は、親しい友人関係にあっては既存の知識によって容易に導入できる対象である。それゆえ、その存在をあ

らかじめ言明したり，談話に新規に導入した対象として形式を整える必要がなく，無助詞成分や取り立ての形式で表現されているのである。

談話において他者に言及する形式では，発話者自身に言及するばあいとの間で形式の選択の傾向に差が認められ，本節ではその「他称＋が」「他称＋は」「他称＋も」および無助詞成分の例を観察した。「他称＋が」は，他称者を新たに導入するばあいや，文型によって制約されるばあい，「他称＋は」は取り立てのばあいに認められた。無助詞成分は，その他称者が先行発話で既に導入されているか，明示的に導入されていないなくても，先行発話の内容に照らしてその者の存在が明かであるばあいに認められた。

4．むすび

本稿では，自由談話を資料とし，小規模の調査によって，発話者が自分自身に言及する部分と，他者に言及する部分とを例示しながら，話題の導入のしかた，発話や発話者の関係，談話のまとまりかたなどを観察してきた。

発話者自身または他者への言及が，談話の話題のきりかえやとりまとめのみならず，発話権の取得や維持，談話を展開する主導権に機能していることを明らかにした。また，話者自身への言及と他者への言及において，形式的な選択の相違が認められ，これが話題の切り換えや継続，部分談話のまとまりかたと関連していることを示した。

以上，事例的な検討の開示にとどまったが，観察の結果から，談話展開の事象と統語論の事象とが相互に関連する度合いは，極めて高いと予測される。こうした境界領域における一つの問題提起として本稿を提出する。

【注】

- (1) 発話の関係は，「関係の範疇（先行発話の番号，後行発話の番号）」のように記述する。なお，ここで列挙した関係は，野村(2001)の提案を改訂してある。
- (2) 発話は，従属節をのぞき，[提題表現＋叙述表現] を基本構造として認定する。ここで提題表現とは，主題・主語・取り立て成分・無助詞成分をあわせてこれと認めるものとする。
- (3) 談話の文字化において，//は発話の重複が開始される位置，=は次の=を付した発話との間隙が認められないこと，?は上昇のイントネーション，()内の数値は沈黙の秒数を表す。また，{ }内には非言語情報，()内には聴取がしにくかった発話の部分を記入する。
- (4) Schegloff and Sacks (1973) 及び Schegloff, Jefferson and Sacks (1977) を参照。

【参考文献】

- 加藤重広 1997 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27:19-82.
亀山 恵 1999 「談話分析：整合性と結束性」『岩波講座言語の科学 7 談話と文脈』

- 岩波書店 :93-121.
- 佐久間まゆみ 2002 「接続詞・指示詞と文連鎖」『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店 :117-189.
- 佐久間まゆみ他編 1997 『文章・談話のしくみ』おうふう
- ザトラウスキー,P. 1993 『日本語の談話の構造分析』くろしお出版
- ザトラウスキー,P. 1997 「かかわりあう」『文章・談話のしくみ』おうふう :164-180.
- ザトラウスキー,P. 2000 「共同発話における参加者の立場と言語・非言語行動の関連について」『日本語科学』7:44-68.
- 杉本 武 2000 「無助詞格のタイプについて」『文芸言語研究 言語篇』38:103-116.
- 砂川有里子 1995 「談話主題の導入形式に関する研究ノート —存在文とコピュラ文の特立提示機能について - 」『文芸言語研究 言語篇』28:41-51.
- 龍城正明 2000 「テーマ・レーマの解釈とスーブラテーマ - プラーク言語学派から選択体系機能言語学へ - 」小泉保編 『言語研究における機能主義』くろしお出版 :49-73.
- 沼田善子 1995 「現代日本語の「も」 —とりたて詞とその周辺 - 」『「も」の言語学』ひつじ書房 :13-58.
- 野田尚史 1996 『「は」と「が」』くろしお出版
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキスト - 関係・効果・様相 - 』ひつじ書房
- 野村眞木夫 2001 「テキストにおける文・発話の関係とテキストの構造化」『上越教育大学研究紀要』20-2:443-458.
- 野村眞木夫 2003 「テキストの意味と構造」『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店 :211-226.
- 野村眞木夫 2004 「談話分析から見た主語」『言語』33-2:34-40.
- 長谷川ユリ 1993 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80:158-168.
- 丸山直子 1995 「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19-8:365-380.
- 丸山直子 1996 「助詞の脱落現象」『言語』25-1:74-80.
- Dahlgren,K. 1988 *Naive Semantics for Natural Language Understanding*.Academic Press.
- Eggsins,S. and Slade,D. 1997 *Casual Conversation*.Cassell.
- Givón,T. 1983 “Topic Continuity in Discourse : An Introduction” in Givón,T.ed. *Topic Continuity in Discourse*.John Benjamins:1-41.
- Halliday.M.A.K. 1994 “ The construction of knowledge and value in the grammar of scientific discourse, with reference to Charles Darwin's The Origin of Species. ” in Coulthard,M. ed. *Advances in Written Text Analysis*.Routledge:136-156.
- Hayashi,R. 1996 *Cognition, Empathy, and Interaction:Floor Management of English and Japanese Conversation*. Ablex.
- Hobbs,J.R. 1978 “ Why is discourse coherent? ” *SRI Technical Note*.176.
- Hobbs,J.R. 1990 *Literature and Cognition*.CSLI.
- Hoey,M. 1991 *Patterns of Lexis in Text*.Oxford U.P.

- Hoey,M. 2001 *Textual Interaction : an introduction to written discourse analysis*.Routledge.
- Mann,W.C. and Thompson,S.A. 1988 “ Rhetorical Structure Theory:Toward a functional theory of text organization. ” *Text*.8-3:243-281.
- Mann,W.C.,Matthiessen,C.M.I.M. and Thompson,S.A.1992 “ Rhetorical Structure Theory and Text Analysis. ” in Mann and Thompson eds. *Discourse Description : Diverse Linguistic Analysis of a Fund-Raising Text*. J. Benjamins :39-78.
- Schegloff,E.A. and Sacks,H. 1973 “ Opening up closings. ” *Semiotica*.7:289-327.
- Schegloff,E.A.,Jefferson,G.,and Sacks,H. 1977 “ The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. ” *Language*.53:361-382.

(上越教育大学 / 日本語学)

『 上越教育大学国語研究 』 18号 (2004年2月)
雑誌掲載時における用語の不統一を訂正してあります。